垂水史談会報

第 61 号
2024（令和6）年
12月発行

【報告】

垂水史談会 理事会

11月24日、垂水史談会の理事会を垂水市立図書館で行いました。

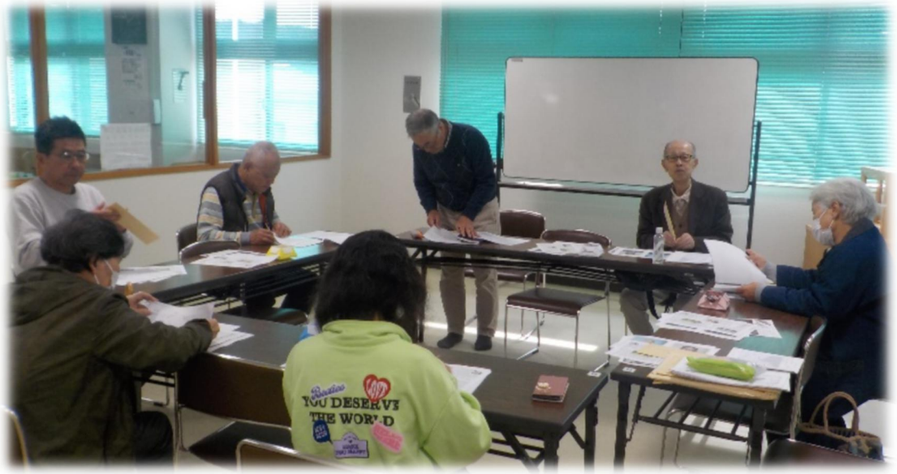
11月8日に、令和6年度 鹿児島県文化財功労者（団体）で、「垂水史談会」が表彰されたことなど、7月以降の経過を報告した後、今後の日程を話し合いました。

史談会では例年、市外に赴く現地研修を企画しており、今回も「志布志市」を視察する予定です。交通手段や、視察内容、駐車場所、休憩所、予算などが協議され、充実した現地研修を目指して、さまざまな意見交換がなされました。

「垂水麓」と共に、日本遺産に認定されている「志布志麓」も訪れる見込みで、日本遺産同士の親睦を深める交流と同時に、他自治体のPR方法や、『魅せ方・楽しみ方』にも触れる予定です。

また、「志布志市埋蔵文化財センター」も訪れる計画であり、有意義な研修となることが期待されます。

（新原清実）



平成6年度（第4ー回）

垂水高等学校史蹟めぐり

十一月二十二日、毎年恒例の垂水高校史蹟めぐりが行なわれました。今年は、水之上方面を歩くBコース約16㎞の行程。ガイドは、垂水史談会から山田義之、瀬角龍平と古場昌彦が勤めました。

〈Bコース〉

① 垂水高校正門出発
② 垂水市文化会館・・明治以降に活躍した垂水人の解説
　和田英作、瀬戸口藤吉、肝付素方
③ 川上周賢墓碑と福寿寺跡
　『垂水史談会報』十一月号で掲載された整備のおかげで、気持ちよく見学できました。
④ 牧の薬師如来像
⑤ 水之上三和センター・・「おんだんこら祭り」の解説
⑥ 勝軍地蔵
⑦ よめじょ川用水取水口
⑧ 手貫神社
　昼食休憩の後、神柱利雄さんに解説をしてもらいました。
⑨ 垂水島津家墓所
　墓所の説明の後、高嶺光佑さんに今年度の遺跡発掘調査の成果について解説してもらいました。
⑩ 林之城跡、お長屋
⑪ 垂水高校正門帰着

後半雨に降られ大変だった昨年と打って変わり、今年は穏やかな秋晴れで、絶好のコンディションでした。今回の自らの足で史蹟をめぐる経験を通して、歴史に興味を持つ子どもたちが増えてくれるとうれしいです。

【生徒の感想から】

・中学校までに何か所か行った場所があったが、ここまで深く説明をしていただいたことは初めてで、また新しい地域の一面を知ることが出来た。（一年）

・実際に行ってその場所の説明を聞くのはとても貴重な経験になったし、垂水の歴史について深く知ることが出来たから良かった。（一年）

・垂水市には武士が生きていた時代の史跡などがたくさんあるということが第一印象だった。次の史跡へと歩いていくたびに、とても美しい川や田畑が見えて恵まれているなと感じた。初めて訪れた場所や、新しく知った様々な歴史や文化が学べて良い機会だったと思った。（一年）

・一番興味があったのは垂水島津家墓地だった。土砂崩れが起きた場所を発掘することで色んなものが見つかったのが面白かった。（一年）

・普段、私たちが住んでいる垂水市にも貴重な史蹟が残されていたことを歩いていく中で知り、そして昔、生活していた人々がどのように歩んでいたのかも改めて感じることが出来ました。皆で協力して、長距離を踏破出来た大きな達成感を味わうことが出来た。（二年）

・山を登って墓地を見に行ったり、川沿いの道を歩くところがあり、垂水の自然を感じながら歴史を知れて良かった。（2年）

・普段何気なく生活している地域にはこんなに史蹟があるのだと驚いた。特に像があるところはきれいに残っていてすごいと思った。（三年）

・何気なく通り過ぎてしまう場所に、こんなにたくさんの史跡があることに驚いた。これからこの場所を通ったら、またじっくり見たいと思った。（三年）

・とても疲れたけど垂水の史蹟を巡り、たくさんの歴史を知ることと学べることが出来たのでとても良い機会になりました。１０個の史蹟でまた新たな発見がありました。楽しかったです。

・３年間で一番楽しかったです。二年間、曇か雨が続いて気分も上がり切らなかったですが、遠足のような気分で最後まで楽しく学ぶことが出来ました。自分の地元を知ることは歴史があるということにつながって、人が居続けられることにもつながると思いました。（三年）

（古場　昌彦）

宮之城視察研修　②

中谷潤心

次に楠木神社を訪ねた。当神社は楠木正成公が御祭神。元禄５（１６９２）年、水戸光圀公（水戸黄門）が湊川の地に嗚呼忠臣楠子の墓」を建て、近くの広厳寺に三体の楠公木像を奉納した。三体のうち一体が伊集院、町田家にもたらされた。それを薩摩藩士有馬新七が、文久元（１８６１）年、伊集院石谷に楠公社を建てご神体として祀った。有馬新七が寺田屋事件で亡くなった後、ご神体は鹿児島城下にあった西郷隆盛の私学校の守り神として祀られ、さらに私学校の教官で宮之城区長でもあった辺見十郎太が明治十（１８７７）年、県令大山綱良の許可を得て、宮之城屋地（やち）字大明神、松尾神社に合祀した。その時、宮之城の人々は総出で出迎えた。その後、昭和二十（１９４５）年、宮之城島津家次席家老平田家の屋敷跡に新しい社殿が完成し、楠木神社と改称。

境内には宮之城平田家初代宗吉の五輪塔と孫一郎生誕碑、西南戦争の「慰霊碑」と「悵旧碑」が建っている。悵旧碑の「惆悵旧歓如夢（ちゅうちょうきゅうかんゆめのごとし）」の文字は勝海舟の揮毫である。

その次に、松尾氏の車の先導で柊野（くきの）地区に赴いた。

かつて３００年にわたり、鹿児島では真宗（一向宗）を固く禁じ、役人による厳しい弾圧が行われていた。このような中でも、熱心な信者達は仏画や経本等を隠し、時には山中の岩穴などで念仏申し、密かに信仰を続けてきた。これを「かくれ念仏」と言う。

ここに「柊野仏飯講」という現役の講がある。ここでの「講」とは、浄土真宗のコミュニティのことであり、柊野地区は住民全員が信者で結束が固く、「かくれ念仏」が発覚することはなかったという。藩の厳しい取締りの時は、上地区の椋の大木の空洞に仏具等を隠したと伝えられている。残念ながらこの大木は平成８年に朽ちて倒れたとのこと。

柊野地区公民館隣のかつての青年会の施設が講舎で、中山氏は「お寺」と呼ばれていた。講の詳細は信仰のことを審らかに記すのは憚られるので、こことは別に記す。多くの什物が伝わっていたり、年中行事も盛んだったり、何より氏の「若い人も必ず年に一回はお参りに来る」という言葉に、今では珍しくなった「講」というコミュニティにこそ、地域や地元の人の精神に深く根ざす信仰の力が生きているのだと実感した。

弘化３（１８４６）年４月８日に、本願寺（西本願寺）直属の講として認可されている。創始者である玉利源之助は、江戸時代後期の1815年に柊野下地区で生まれ、若くして阿蘇東光寺の環中という僧分の布教に感化を受けて、密かに肥後瑞牛寺、京都本願寺で教義を修め、初代講頭となった。ちなみに、話を聞かせていただいた講の中山氏の言い方では「講長（こうちょう）」と言われていた。

―以下次号―

《垂水の方言と言い回し》その①

１１月第３週は『鹿児島県方言週間』ですが、方言を駆使できる方々も、理解できる若者も少なくなってきています。

そこで、垂水方言を使った言い回しをいくつか紹介し、その豊かな表現を味わってほしいと思います。なお、地域により微妙に違いがあります。

（中俣地区）

きいきいめをせた・・・（痛くて）きりきり舞いをした。
長ごないやい・・意味としては「長くなりなさい」の意だと思われる。畳の上にキチンと座っていなくていいから、寛いでゆっくりしなさい。
すんなつて　くわたっすいが・・するな、というのにわざとするねえ。
おや、かぁもでふつなったたっど・・おれは、からいも（サツマイモ）を食べて大きくなったんだよ。
あんた　よんごぎねじゃっで・・あいつはへそ曲がりだから。
こんた　だぁが仕事っよ・・これは誰がしでかしたのか。
あいせぇ貸せたぎいもどらん・・あいつに貸したが最後、戻って来ない。
そんた　ぎじゃが・・それは（へ）理屈だよ。
かったこう　言むんじゃ・・妙な（理解不能な）ことを言うものだ。
あんわろ　こんわろ　そんわろ　どんわろよ・・あいつ、こいつ、そいつ、どいつだ。
柿くひっちぎったたぁ　わいどんか・・柿をちぎったのはお前たちか。

（瀬角龍平）